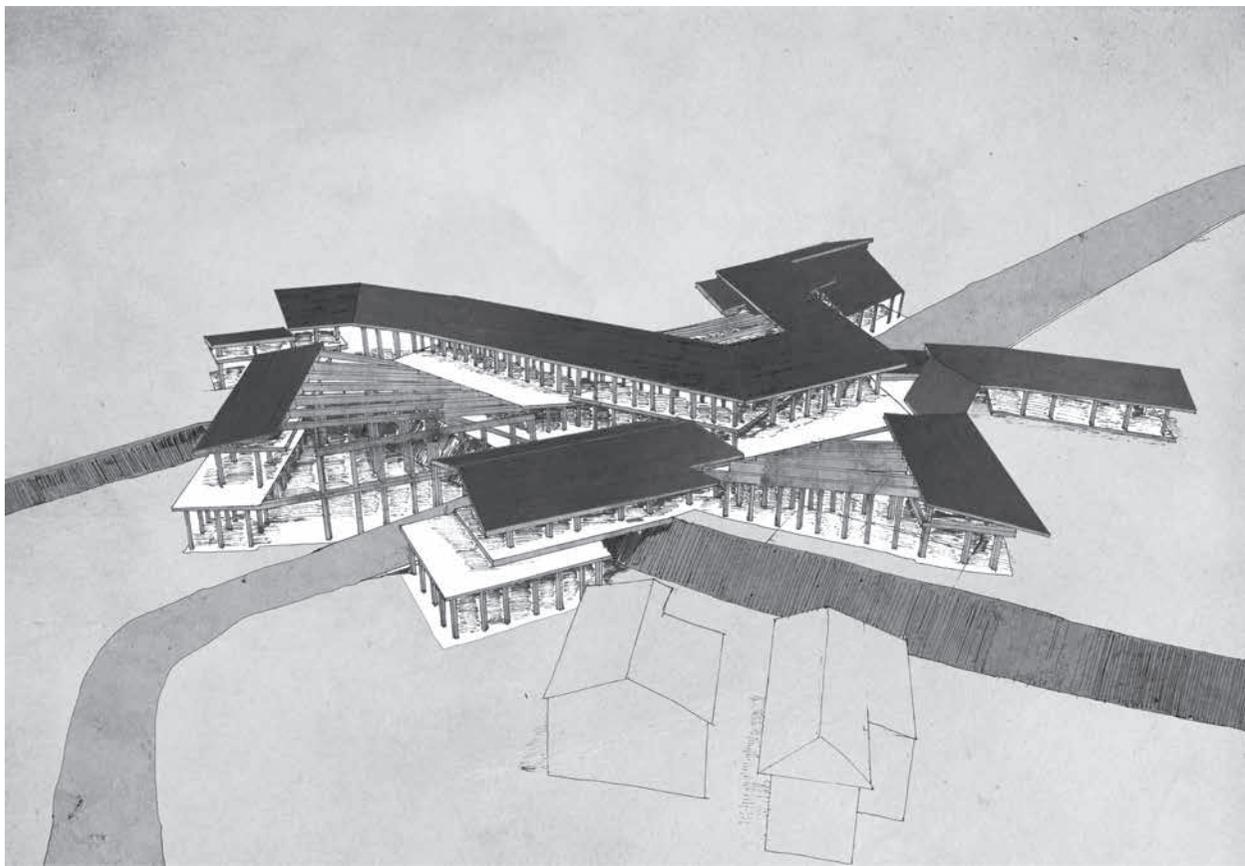
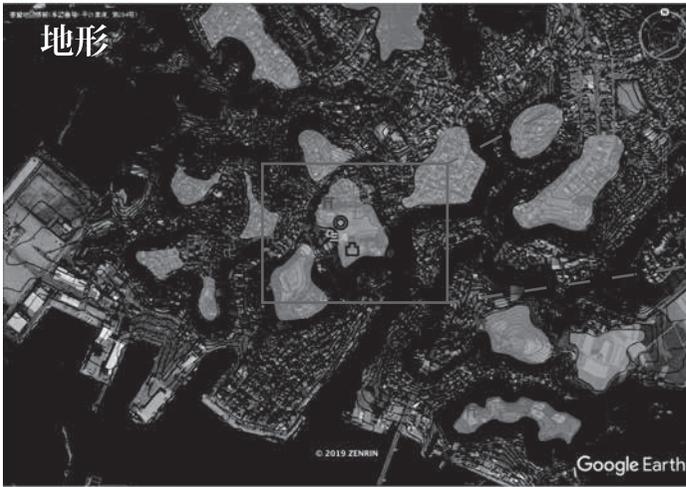


人も建築も常に大地に因って在る。
人が暮らす空間を作るとき、
その土地の風土 - 地形的特徴 - に寄り添って、
また、ときに依拠して設計するべきだと考え試行する。

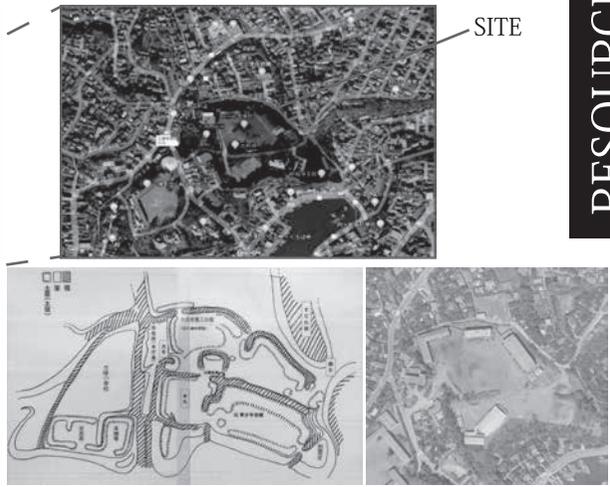


敷地：神奈川県三浦市

三浦市は海岸段丘という無数の台地と谷戸からなる景観豊かな地形や、三浦ダイコンなど露地栽培中心の農業やかつてから三崎マグロなど遠洋漁業の拠点である三崎港を中心とする漁業といった第一次産業など豊富な資源を有する土地でありながら、交通の不便さや雇用不足により人口減少・高齢化・空き家問題などの著しい典型的な地方都市であり、神奈川県内の市で唯一の消滅可能性都市にリスト入りしている自治体である。



敷地周辺の谷戸と台地



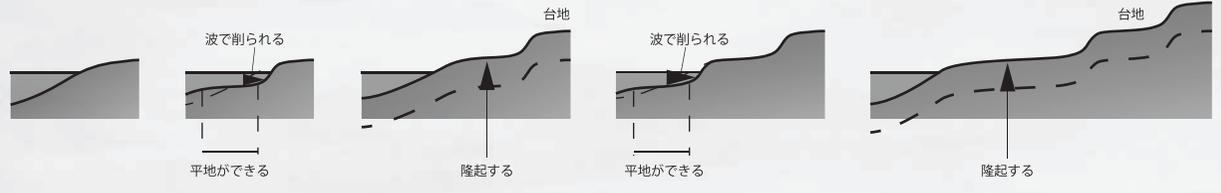
三崎城説明図

1963年の敷地の様子

三浦のカタチ

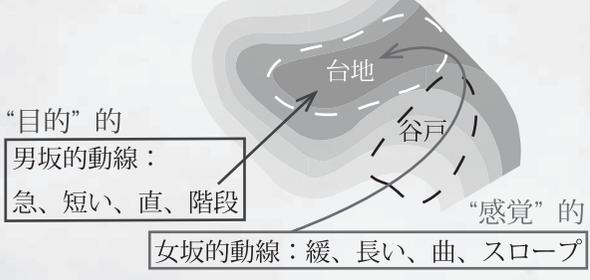
海岸段丘という特徴的な地形により、台地と谷戸が入り組んでおり、“坂を登ると平らな居場所が得られる”というかたちが常態化している。その現れとしても台地上には寺院や神社が置かれ、自由な居場所であった。

海岸段丘の成り立ち



この繰り返しで生成される

三浦の地形と動線



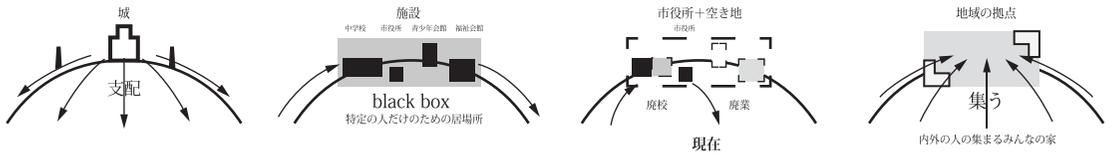
多様なアプローチ

また、単に独立した丘が乱立するのではなく、段丘となっていることにより台地上までに様々なアプローチがあり、“登る”こと自体が魅力的な土地である。

▼ 三浦における坂道とその先の開けた平地、そして広がる空



敷地 コンテキスト & ビジョン

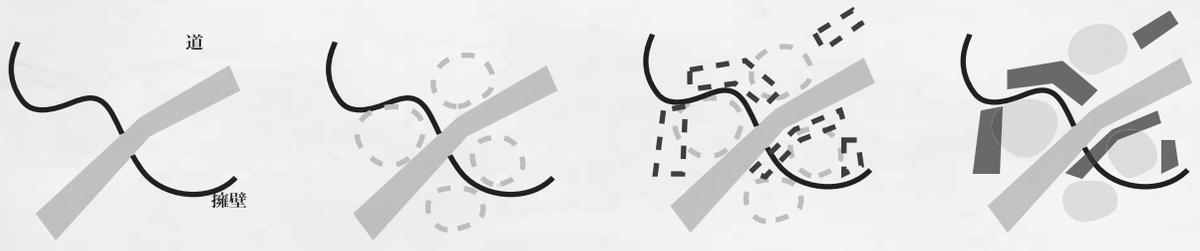


支配的でもなく、施設のでもない、誰しも自由に集える広場的な地域の拠点へ

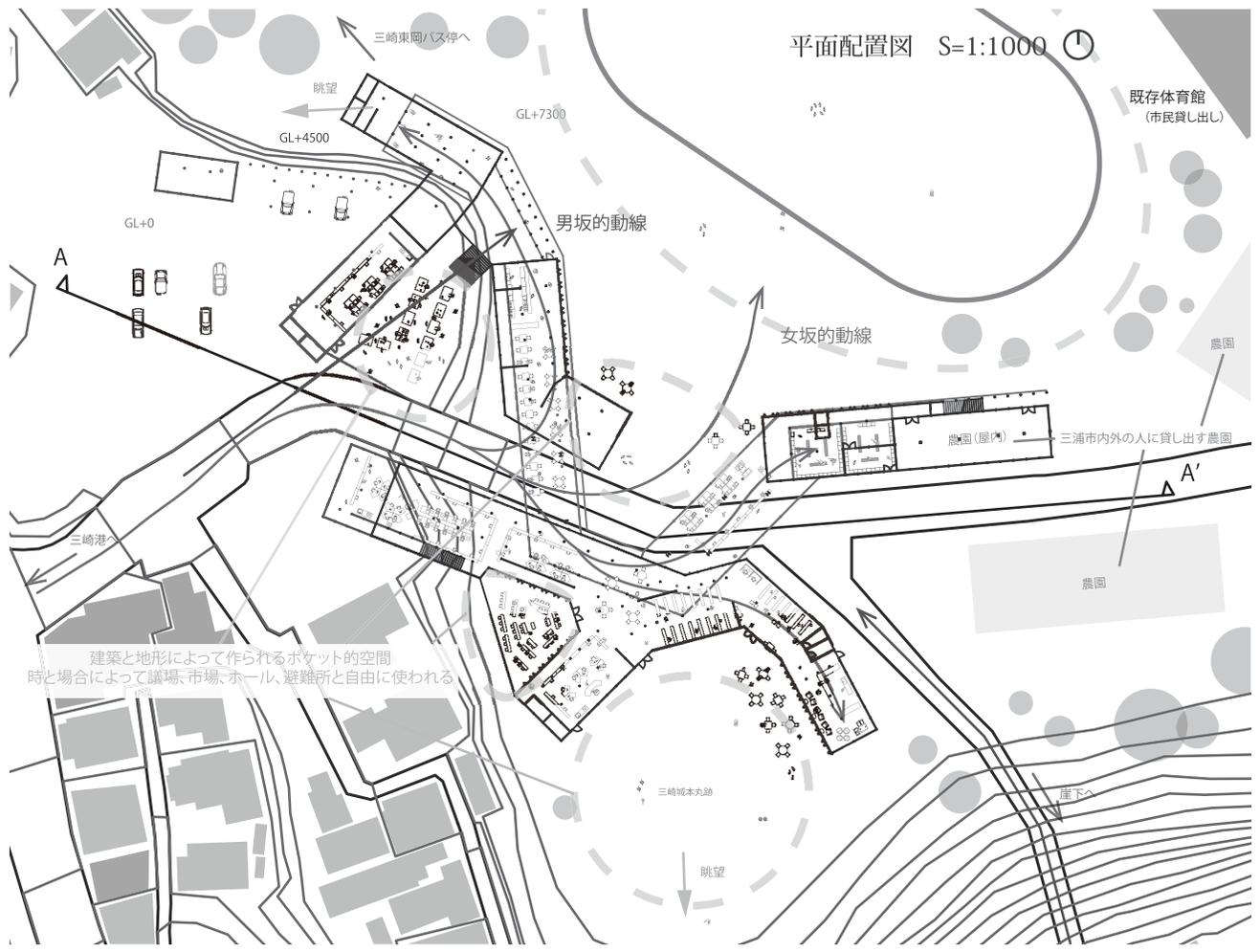
ダイアグラム - 大地（台地）と共に空間作る建築 -

建築内部にのみ空間を作るのではなく、地形とともに外側にも場を作る。

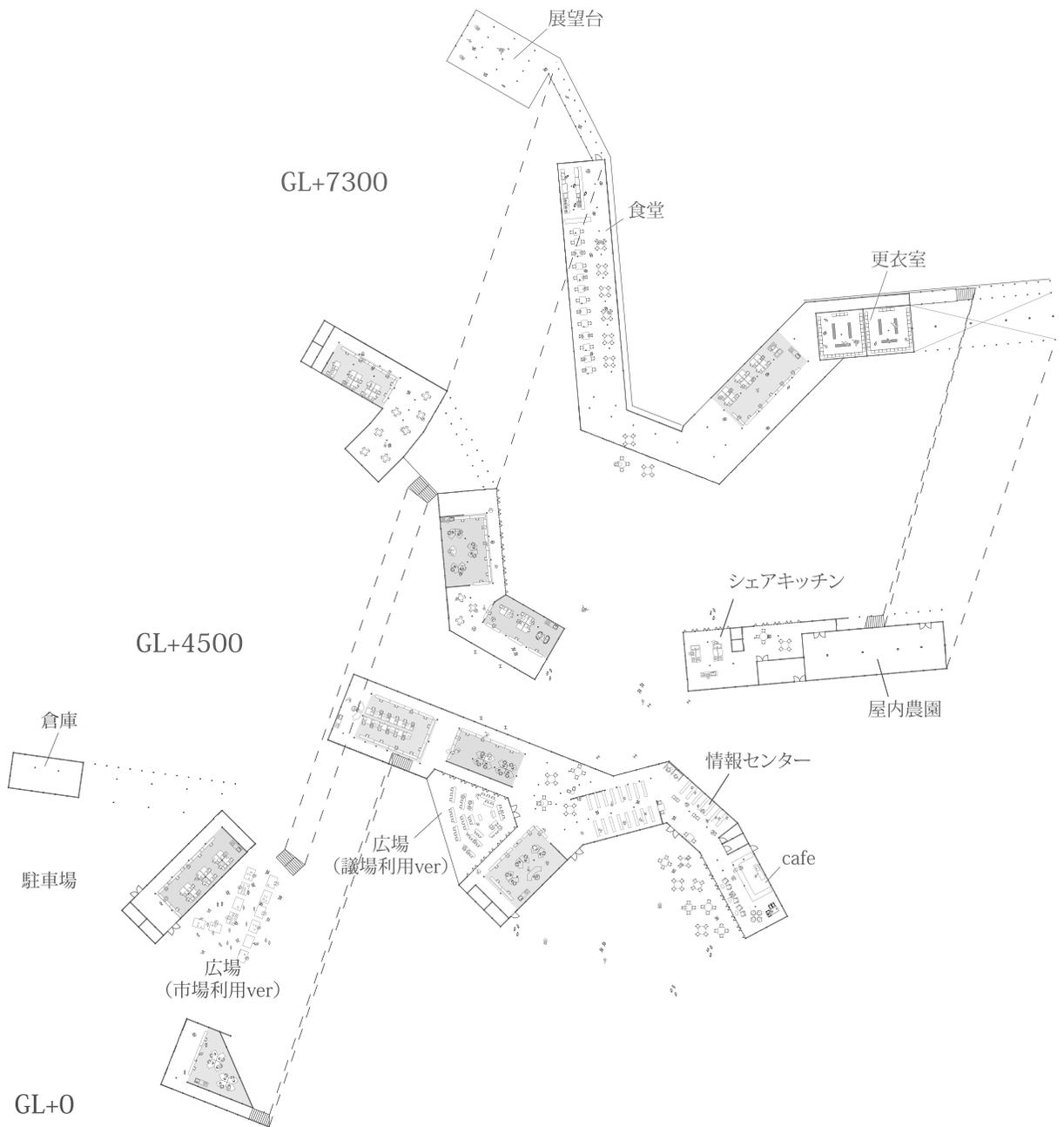
三浦においては台地上をヒューマンスケールの居場所に設えるインフラ的な役割となる。



地形と道 空間のできるポテンシャルを見つける 空間を意識して建築を配置する 空間が顕在化する



建築と地形によって作られるポケット的空間
時と場合によって議場、市場、ホール、避難所と自由に使われる



プログラム

これからの時代に必要な役所の最低限の機能を残し、従来の市庁舎的な閉じたハコを開く。そこにこの地域の産業に関わるプログラムを入れる。また、民間への貸オフィス・アトリエ・スタジオ・農園を持つことで、生産者・消費者、企業の官民間問わず皆が集まる三浦流の「みんなの家」的な建築を設計する。

市役所機能

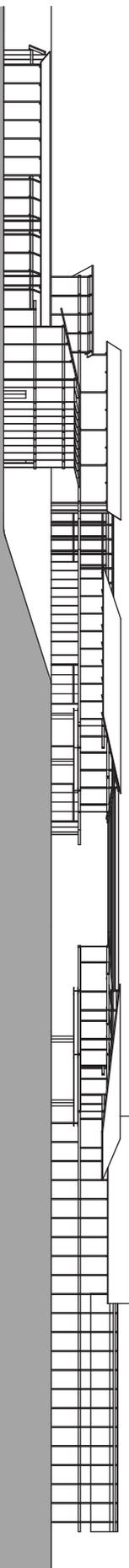
- ・ 議場
- ・ 相談窓口
- ・ オフィス (行政機関、民間企業)
- ・ アトリエ、スタジオ、キッチン
- ・ 場外市場、直販所
- ・ 食堂、カフェ

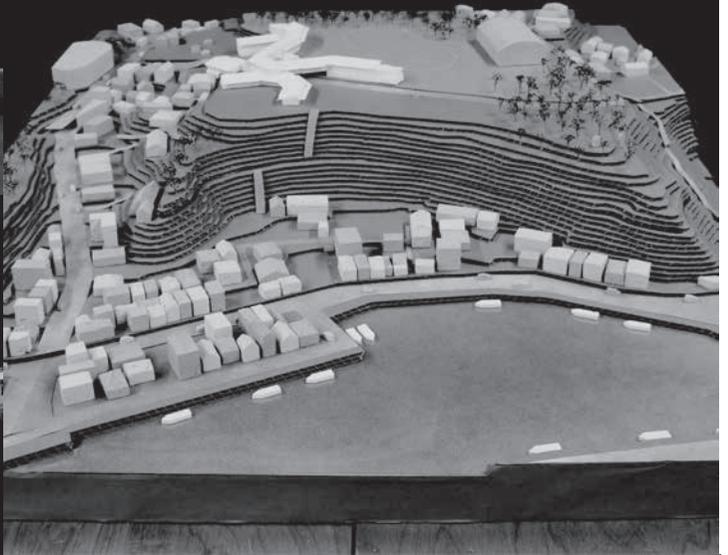
一般利用

三浦の産業 (食) に関わるプログラム



A-A' 断面图 S=1:600

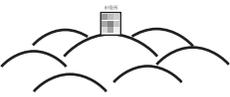




三浦のこれからの暮らし方

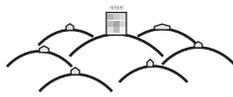
上と同様に、それが存在することで坂の上が居場所となるような建築を計画していき、地図上で線引きされた行政単位ではなく、**地形単位の暮らしの図式**を作り提案する。これは“三浦”の大地と

“どう付き合うか”の提案であり、この提案によってこの地形を交通の不便さに繋がる障壁としてではなく、人が集いやすく繋がりを結びやすい**豊かな資源**として再認識できることを期待する。

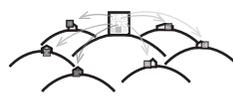


現在

様々な市民のための機能が1つの丘の上で1つのハコに収まって孤立している

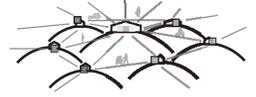


それぞれの丘の上に〈みんなの家〉的な居場所を作る



三浦の人々の集い場のかたち

機能をそれぞれの〈みんなの家〉に併設させるように分散する
⇒市民と議員のキヨリが近くなる



市役所は“施設”から〈大きなみんなの家〉的な三浦の拠点に
議員が丘どうしを繋ぐ

Special Thanks

Takashi Todoroki

Kyo Yagihashi

Takumi Abe

Yuho Ishii

Kohei Shimizu

Ayane Takahashi

Yuki Yazaki

Wataru Takeuchi

Kyoya Tokuta

Yuta Hagiwara

Rin Masuhara

Shunsuke Morishima

Shugo Kashiwagi

Hikaru Kahn

Satoshi Ihara

Yushi Kume

Haruya Koyama

Shimpei Fujimoto

Fin |

